

第Ⅲ章 嘉手納飛行場より南の駐留軍用地の

跡地利用に向けた取組みの整理

第三章 嘉手納飛行場より南の駐留軍用地の跡地利用に向けた取組みの整理

1. 本調査の背景

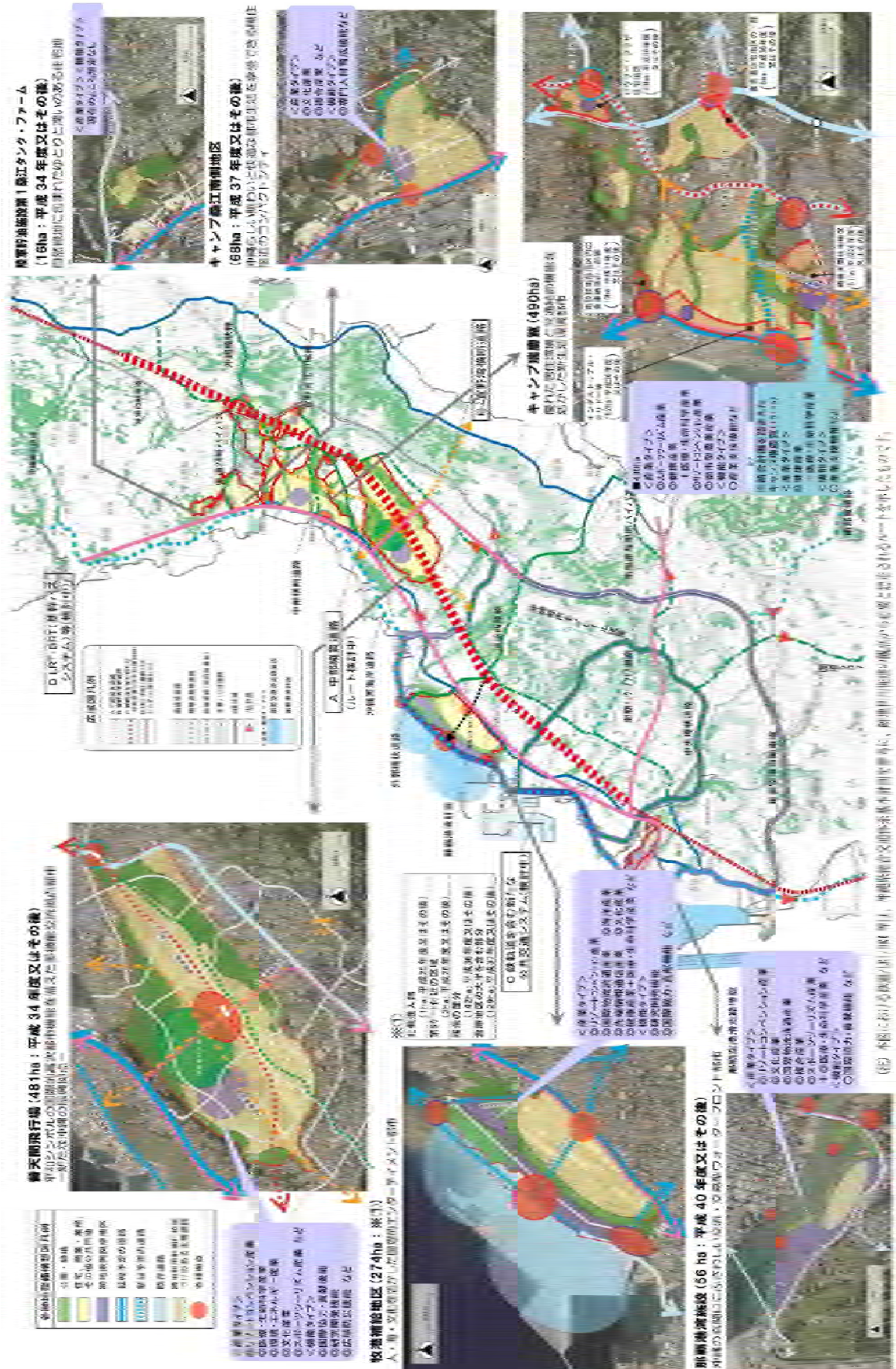
沖縄 21 世紀ビジョンでは、今後返還が予定されている嘉手納飛行場より南の大規模な基地返還跡地の開発においては、広域的な観点から、各跡地利用計画を総合的に調整し、周辺都市地域と一体となった効率的整備を図ることとしている。

平成 25 年 1 月に策定した「中南部都市圏駐留軍用地跡地利用広域構想」では、中南部都市圏を一体としてとらえ、各跡地の特性を活かしつつ、広域的な観点からの役割を分担・連携した開発により、沖縄全体の発展につながる 100 万都市の形成を目指すこととしている。

「中南部都市圏駐留軍用地跡地利用広域構想」は策定から 5 年が経過し、キャンプ瑞慶覧西普天間住宅地区が平成 27 年 3 月に返還されるなど社会経済情勢も策定時から変化している。各跡地利用が広域的な視点からの役割を分担・連携したものとなるように更新を検討する必要がある、その更新に向けて、社会経済情勢の変化を把握するとともに、返還及び返還合意された嘉手納飛行場より南の 6 施設における跡地利用に向けた検討内容及びスケジュールの把握・整理を行った。あわせて、6 施設周辺を含む広域都市基盤（国道・県道、河川、海岸等）に関する整備計画及びスケジュールを把握・整理した。

2. 嘉手納飛行場より南の駐留軍用地の概要

中南部都市圏駐留軍用地跡地利用広域構想図



3. 広域構想策定以降の社会情勢変化

■社会情勢の変化

【人口】

○沖縄県の人口はこれまで増加傾向にあったが、将来には人口減少が見込まれており、**2025年前後にピーク**となると推計されている。

【経済】

○経済特区の指定を受け立地企業の税制優遇措置等が講じられている。

- ・「産業高度化・事業革新促進地域」：製造業等へ製品開発支援等
- ・「情報通信産業促進地域」：国際海底ケーブル敷設(平成27年度)他
- ・「観光地形成促進地域」：中城港湾西原与那原地区にマリナー施設供用開始(平成28年度)他
- ・「国際物流拠点集積地域」：沖縄国際物流ハブ事業開始(平成21年)他

○平成27年9月、「沖縄県アジア経済戦略構想」が策定され、沖縄21世紀ビジョン関連施策を補完・強化・促進し、比較優位(沖縄の地理的優位性、人を引きつける「ソフトパワー」)を活かし、**アジアのダイナミズムを組み合わせ**、沖縄の発展を加速させる具体的な戦略が示された。

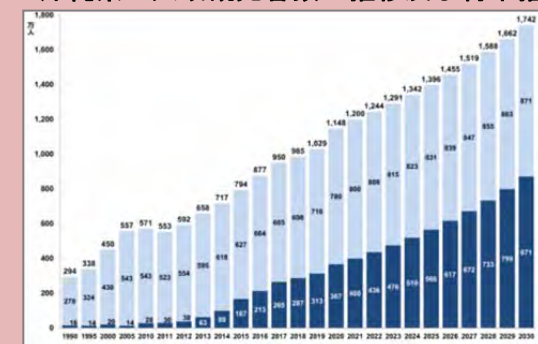
【観光】

○平成22年に中国人向け個人旅行ビザの発給等を背景に沖縄を訪れる外国人観光客は大幅に増加。平成24年度に40万人弱だった**外国人観光客数は平成28年度に200万人を超え**、観光客の約1/4が外国人観光客となっている。入域観光客数は今後も増加が見込まれ**2025年で国内外を合わせて1,300万人を超える**ことが予測している。(沖縄観光コンベンションビューロー推計)

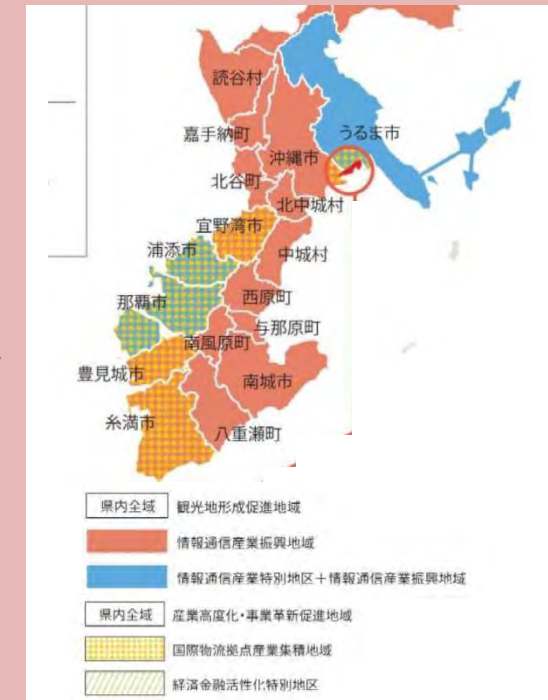
■沖縄県の人口推移及び将来人口推計



■沖縄県の入域観光客数の推移及び将来推計



■沖縄の特区・地域制度の指定区域



■沖縄21世紀ビジョン基本計画の改定(平成29年5月/沖縄県)

○広域構想の上位計画となる沖縄21世紀ビジョンについて、基本計画の改定計画が公表され、西普天間住宅地区跡地、アワセゴルフ場跡地に関する記述が追加された。

■沖縄21世紀ビジョン[改定計画]の抜粋

○駐留軍用地跡地の有効利用の推進の施策展開

- ・早期の事業着手に向けた取組み
- ・跡地における産業振興及び国際交流
- ・返還跡地国家プロジェクトの導入
- ・駐留軍用地跡地の計画的な整備
- ・貢献拠点の形成
- ・駐留軍用地跡地利用推進についての協議

○圏域別展開の基本方向(中部圏域)

- ・普天間飛行場跡地を中南部圏域の新たな振興拠点として位置付け、国及び宜野湾市と連携して、跡地利用計画の策定に取組むとともに、返還が予定されている他の駐留軍用地跡地開発と連携した整備を行い、中南部都市圏の都市構造の再編を図る。
- ・キャンプ瑞慶覧の跡地については、骨格的な道路網の整備や新たな公共交通システム、住宅、商業・業務棟の多様な機能の導入を検討する。
- ・**西普天間住宅地区跡地については、国、宜野湾市、琉球大学等と連携し、琉球大学医学部及び同附属病院の移設を中心とする国際性・離島の特性を踏まえた沖縄健康医療拠点の形成に向けて取り組む。**
- ・キャンプ桑江南側地区及び第一桑江タンクファームの跡地については、緑豊かな住宅地や生活関連施設、行政サービス施設等の整備を進めるとともに地域商業等の活性化を図り、職住近接のまちづくりを進めます。
- ・**アワセゴルフ場の跡地については、土地区画整理事業を進めるとともに、観光と防災に配慮したまちづくりを図る。**

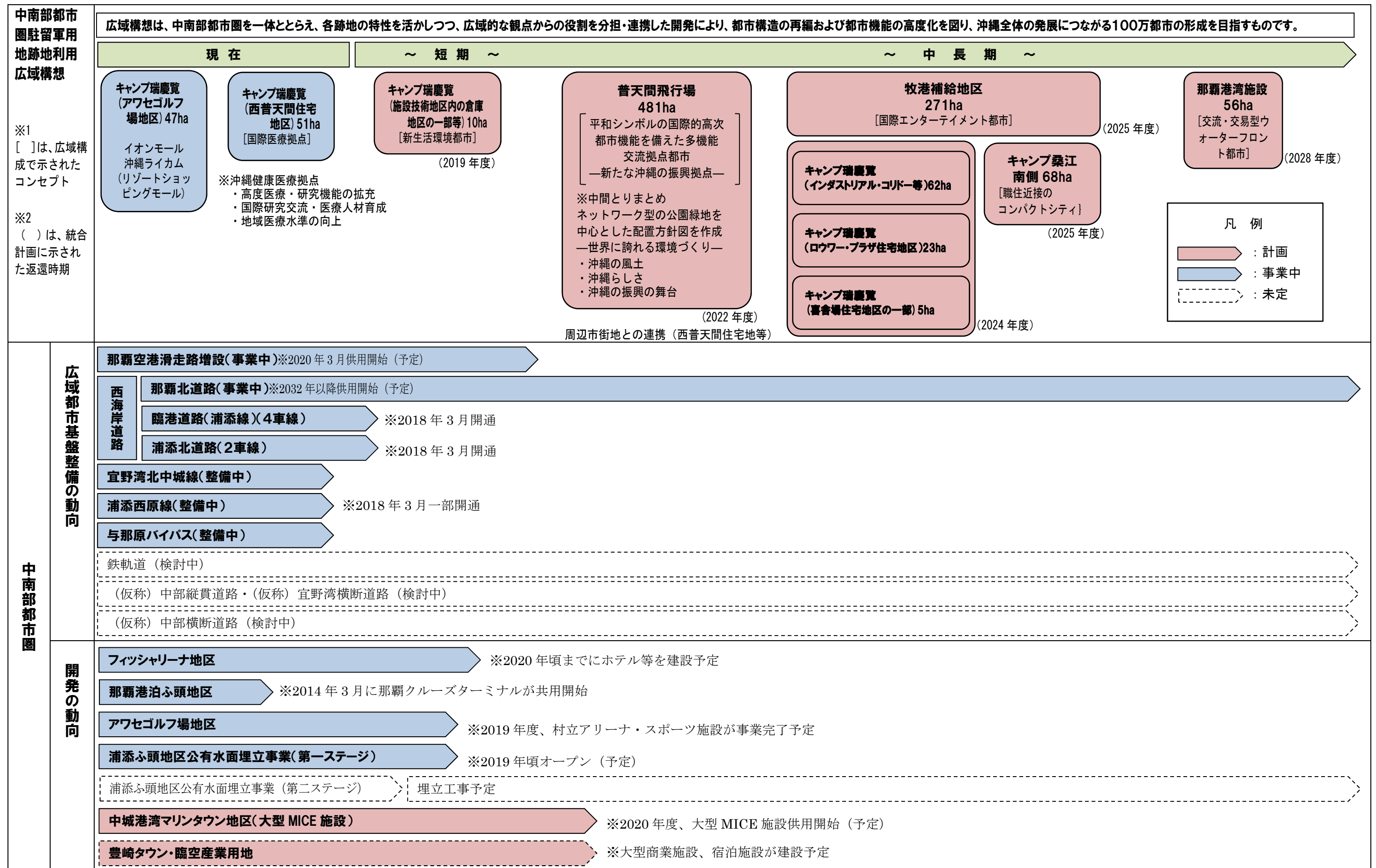
※赤字が新たに追記された内容

■統合計画における嘉手納飛行場以南の土地の返還[概要図](平成29年3月更新/防衛省)

○「沖縄における在日米軍施設・区域に関する統合計画」で返還区域及び返還時期が示された6施設のうち、キャンプ瑞慶覧(西普天間住宅地区)及び牧港補給地区(北側進入路)が返還された。



■ 中南部都市圏における広域都市基盤整備及び開発の動向について



■ 中南部都市圏における広域都市基盤整備及び開発の動向図

■ フィッシャリーナ地区（北谷町フィッシャリーナ整備事業）

商業機能と連携した水産業・観光・海洋レクリエーション等のマリン産業が融合したまちづくりを目指し、宿泊施設や商業施設の整備が進められている。2016年7月までに土地処分が完了。2020年頃までにホテル等を建設予定。

■ 沖縄西海岸道路

2016年度までに那覇西道路（暫定）や豊見城・糸満道路が供用。2018年3月に浦添北道路・臨港道路浦添線が開通。

■ 那覇港浦添ふ頭地区公有水面埋立事業（第一ステージ）

2019年頃にオープン予定。

■ 那覇港クルーズ船バース

2014年3月より泊ふ頭地区において那覇クルーズターミナルの供用を開始。新港ふ頭地区においてもクルーズ船の第2バースが計画されている。

■ 鉄軌道

鉄軌道の構想段階における計画案づくりは、2014年10月より県民や市町村、関係機関と情報共有を図りながら、段階的に検討を実施。2018年3月に計画検討委員会が、那覇市から浦添市、宜野湾市、北谷町、沖縄市、うるま市、恩納村を經由して名護市に至る推奨ルートなどを盛り込んだ構想段階の計画書案をとりまとめている。

■ 基幹バス

2019年度を目途に基幹バスの導入を検討しており、2015年よりバスレーン延長、2016年より急行バスの運行、2017年よりART（自動運転等の次世代都市交通システム）の実証実験を実施。

■ 豊崎タウン・臨空産業用地

2015年度に事業者公募、2016年度に事業者決定。大型商業施設、宿泊施設が建設予定。（2020年開業予定）

【沖縄鉄軌道の構想段階における概略ルート案（2018年3月時点）】
那覇市、浦添市、宜野湾市、北谷町、沖縄市、うるま市、恩納村、名護市を經由するルート

■ アワセゴルフ場地区

2015年4月大型商業施設が開業。2016年4月中部徳洲会病院が開院。（2017年3月、地域災害拠点病院に指定）2019年度、村立アリーナ・スポーツ施設が事業完了予定。

■ キャンプ瑞慶覧（西普天間住宅地区）

2015年3月に跡地返還。「骨太の方針2017」において、琉球大学医学部及び附属病院の移設、「沖縄健康医療拠点の形成」及び普天間高校を活用した「人材育成拠点の形成」が位置づけられ、土地の先行取得を実施。2018年3月末、地権者に引き渡し。琉球大学医学部・附属病院は2024年度末移転予定。

■ (仮称)中部縦貫道路・(仮称)宜野湾横断道路

2016年度より普天間飛行場跡地道路整備検討会議を組織し、駐留軍用地跡地内における「(仮称)中部縦貫道路」・「(仮称)宜野湾横断道路」の道路整備のあり方等の検討に着手している。

■ 沖縄都市モノレール延長事業

2019年春の開業を目標に首里～だこ浦西駅間（約4.1km、4駅）を延伸工事中。モノレール駅と高速道路の結節点整備についても予定。

■ 国道506号・国道329号（2環状・7放射道路）

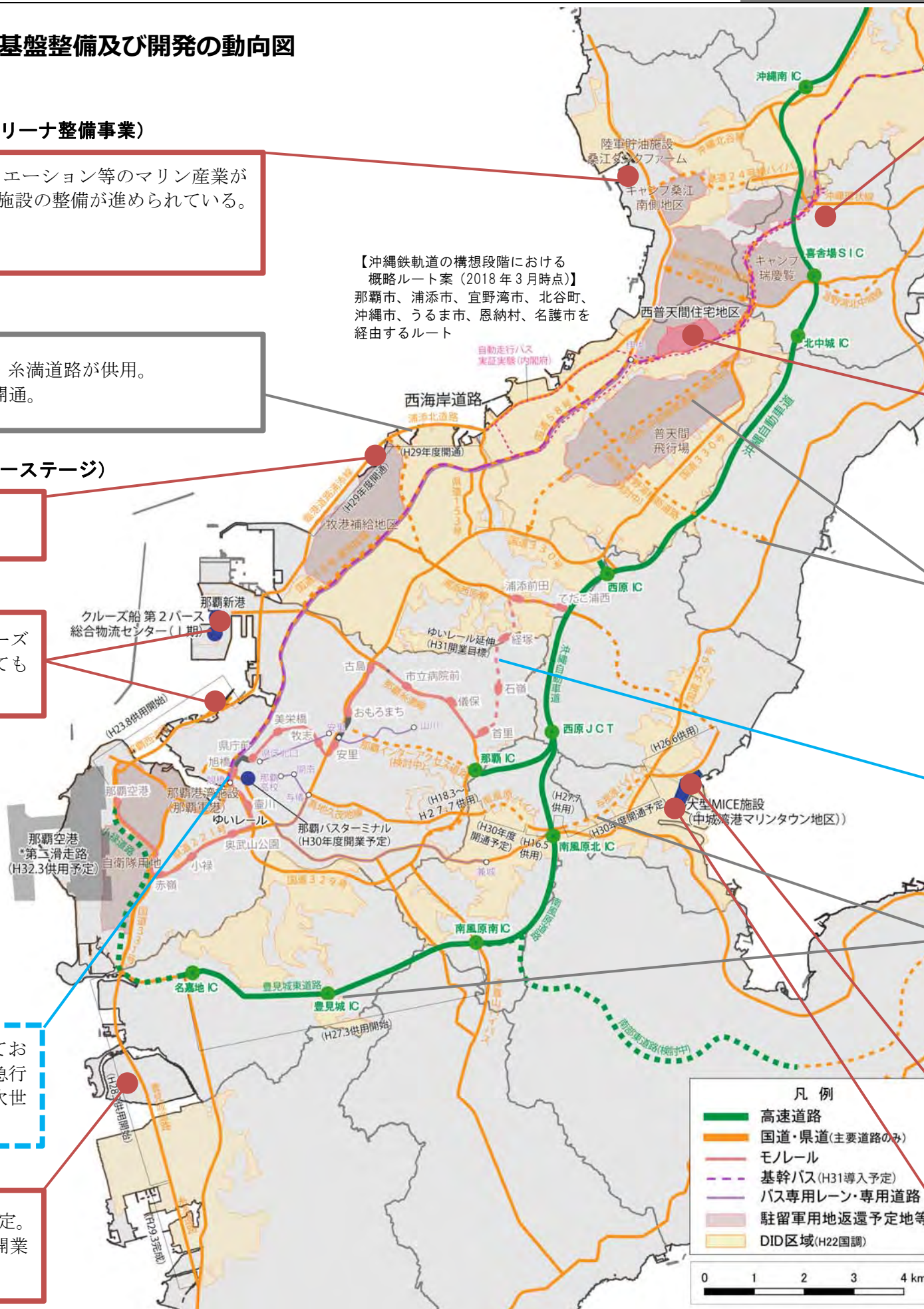
【環状】2015年に豊見城東道路(R506)が供用。
【放射】2018年度に与那原・南風原バイパス(R329)が開通予定（一部暫定）。

■ 中城港湾マリンタウン地区

2015年5月に大型MICEの建設決定。（2020年度供用開始予定）

■ 中城港湾西原与那原地区

2016年7月に与那原マリーナが供用開始



図Ⅲ-3-1 中南部都市圏における広域都市基盤整備及び開発の動向

4. 各駐留軍用地における旧集落の歴史文化、自然環境の整理（シマの基層）

■目的

駐留軍用地跡地には、かつて地形や緑地、水系などの自然環境とのかかわりを大切にしながら、集落での生活や生業、祭祀行事などの暮らしがあった。跡地利用を検討するにあたり、先人たちの土地利用に関する知恵や空間構成などを継承していくため、嘉手納以南の普天間飛行場跡地を除く5施設に含まれる旧集落の『シマの基層』を整理する。

※『シマの基層』とは

「普天間公園（仮称）への提言書」で示された概念であり、その中で以下のように定義づけられている。

琉球の歴史文化には、首里城をシンボルとする王朝の歴史文化のみならず、(中略)庶民の暮らしにも通底する基層的な歴史文化の厚みがある。それは、跡地に残された湧泉や拝所、集落構造や地形・水系・自然などの資源とともに、これからの沖縄のまちづくりに生かすべき重要な財産である。ここでは、それを「シマの基層」と呼ぶ。

（「普天間公園（仮称）への提言書」より抜粋）

上記の『シマの基層』の概念は、「普天間公園（仮称）」のみならず、旧集落が存在していた駐留軍用地に共通するものであり、跡地利用計画における重要な要素であると考えられる。

■『シマの基層』整理の手順

1. 米軍による航空写真（1945年撮影）から、各駐留軍用地に含まれていた旧集落を抽出する。

2. 旧集落の字誌や市町村誌等の既存文献から、各旧集落における『シマの基層』について下表の項目を整理する。

【歴史・文化】

- ・生活空間：集落、馬場、番所等
- ・生産：農地、水田、サターヤー等
- ・史跡：拝所、城跡等
- ・集落の移転先について

【自然環境】

- ・地形地質：地形、地質、土壌等
- ・緑地：毛（モ一）、抱護林等
- ・水資源：湧泉（カ一）、河川等

表Ⅲ-4-1 駐留軍用地に含まれる旧集落

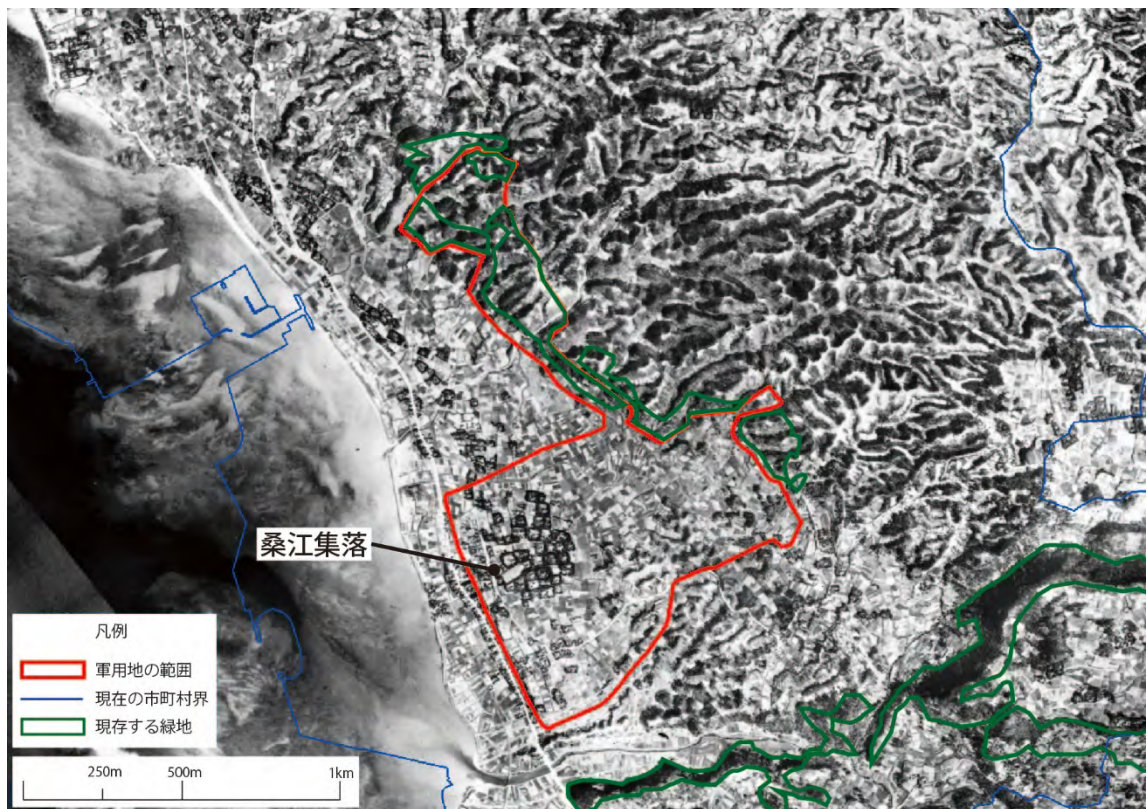
駐留軍用地	旧集落
(1) キャンプ桑江南側地区及び 陸軍貯油施設第1 桑江タンク・ファーム	【北谷町】・桑江集落
(2) キャンプ瑞慶覧	【北谷町】 ・北谷集落 ・玉代勢集落 ・伝道集落 【宜野湾市】・普天間集落 ・伊佐集落 ・安仁屋集落 【北中城村】・屋宜原集落 ・瑞慶覧集落
(3) 牧港補給地区	【浦添市】 ・小湾集落 ・仲西集落 ・城間集落
(4) 那覇港湾施設	【那覇市】 ・住吉町 ・垣花町 ・山下町

(1) キャンプ桑江南側地区及び陸軍貯油施設第1 桑江タンク・ファーム

(1) - 1 駐留軍用地と旧集落との位置関係



図Ⅲ-4-1 キャンプ桑江南側地区及び陸軍貯油施設第1 桑江タンク・ファーム周辺の航空写真
(2017年現在)

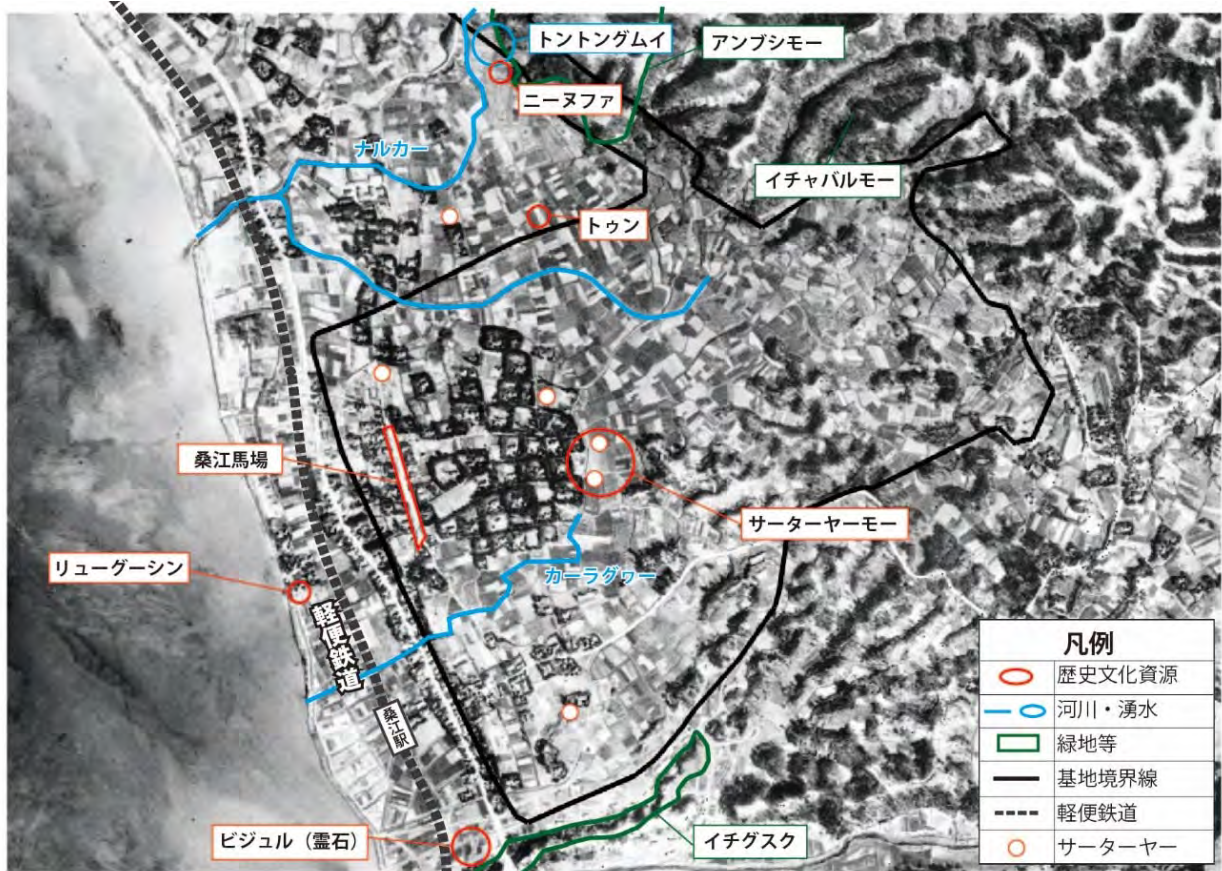


図Ⅲ-4-2 キャンプ桑江南側地区及び陸軍貯油施設第1 桑江タンク・ファーム周辺の航空写真
(1945年当時)

(1) - 2 桑江集落に関する既存文献から得られた知見

【地形】	・東シナ海に面する沖積低地に立地し、肥沃な畑に囲まれていた。東側は琉球石灰岩の台地。
【集落】	・桑江駅があったことから、人や荷馬車が行き交う交通の要所となっていた。
【宅地】	・屋敷の多くは西向きであった。これは「背後に山があり、前方が水に面していること」を吉とする風水地理が理由であったと考えられる。 ・防風、防潮、火災時の延焼を防ぐことを目的とした屋敷囲いが見られた。樹種はガジュマル、ユーナ、フクギ等であった。 ・深く掘らなくても水が出たため、ほとんどの屋敷に井戸があり、その水質は良好であった。
【道路】	・集落内の生活道（スージ）は道幅 3m 程度で、馬車が 1 台通れるほどであった。 ・桑江馬場では、ウマハラセーや綱引き、沖縄相撲大会などが催されていた。日頃は市場が開かれるなど、集落の中心地となっていた。

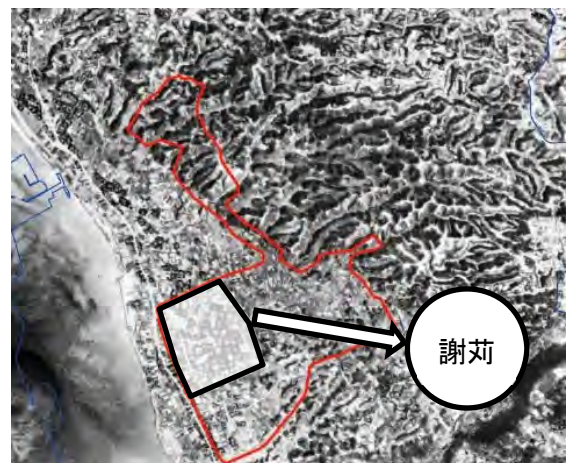
歴史・文化	生活空間	<p>【集落】・約 60 戸。屋取集落を含むと約 200 戸。各戸に井戸がある。</p> <p>【屋敷】・屋敷の向きは西向きが多い。これは「屋敷の後ろにあまり高くない山があることは吉」という風水上の理由からだと考えられる。</p> <p>【井戸】・井戸は各家にあったが、海側の井戸には潮が混ざるので、飲み水はほかに汲みに行っていた。</p> <p>【馬場】・ウマハラセー（馬走らせ）や綱引き、沖縄相撲大会などが催され賑わった。日頃は野菜やイモなどの市場が開かれた。</p> <p>【マチヤ】・軽便鉄道の駅があり、大小のマチヤ（商店）が立地していた。</p>
	生産	<p>・農業が中心で、砂地が多いので落花生を作っていた。また、組合を作りトマトの栽培・出荷を行っていた。</p> <p>・集落内には北側、南側に 2 つのサーターヤーがあった。</p>
	史跡	<p>・ビジュル：石造りの祠</p> <p>・土帝君：場所不明</p> <p>・リュウゲーシン：ハーリーの時に拝む拝所。</p> <p>・ニーヌファ：トントングムイのすぐそばにあった拝所。セメント造りの祠だった。</p> <p>・トゥン：集落の北側にあった拝所。石の塊でウコーが置けるようになっていた。</p>
	移転先	<p>北谷町謝苺</p> <p>戦後はキャンプ桑江などとして接収された。その際住民は主に謝苺地区に移り住んだが、のち東部の一部が返還され居住可能となったため、昭和 55 年に行政区桑江が新設された。</p>
自然環境	地形・地質	<p>・東シナ海に面する沖積低地に立地し、肥沃な耕地を抱える。</p> <p>・東側の地質は丘陵地となり、さらに東には台地斜面となり、琉球石灰岩の台地へ移行する。</p>
	緑地	<p>・イチグスク：北谷トンネル開通後はトンネルヤマと呼ばれた。</p> <p>・サーターモー：サーターヤーが 2 基あったため、この一帯がサーターモーと呼ばれた。ここには、豊年神・遊神が祀られた。</p> <p>・アンブシモー：漁師が網を干すために利用された。</p>
	水資源	<p>・ナルカー：水質が良いため、生活用水として使われた。水路を作って田圃に流し込んでおり、農業用水としても貴重な水源となっていた。</p> <p>・カーラグワー：川幅はそれほど広くはなく、畑に降った雨水が海まで流れていた。</p> <p>・トントングムイ：ナルカーの滝の下方にあるクムイ。水源として利用</p> <p>・ンマアミシグムイ、クムイグワー：子供の水浴や牛馬の水浴に利用</p>



図Ⅲ-4-3 桑江集落構成要素図



図Ⅲ-4-4 桑江集落周辺の地形
(米軍作成地図(1948年作成)に加筆)



図Ⅲ-4-5 桑江集落の移転先

【参考資料】



出典：北谷町の地名（北谷町教育委員会）

図Ⅲ-4-6 桑江集落周辺の地名



出典：北谷町史 3 卷（北谷町教育委員会）

図Ⅲ-4-7 桑江駅周辺の商店分布(昭和 19 年頃)